

師範の横顔

29

茨城支部道場指導部師範

稲垣繁實 八段

岩間での稽古

——先生の合気道との出会いをお聞かせください。

稲垣…私は十二歳の時、昭和三十三年（一九五八年）、今から五十五年前に合気神社付属道場（現茨城支部道場）に入門しました。当時の男の子は赤胴鈴之介、鞍馬天狗や猿飛佐助の漫画や映画を見て、強さに憧れていた時代でした。合気道の先生は忍者みたいに天井にピタリと貼り付くことができる子供達の噂になっていたので大変に興味があり、紹介者を介して門人帳に毛筆で記載し入門が許され



後に世に語り継がれる稲垣師範の言葉が、開祖の言葉が伝わる

ました。

稽古が始まる前、控室で待っていると、大先生が夕食を終えられ、道場と控室の框に腰を下ろされました。思い切って、「大先生は障子の棧を伝わって天井に駆け上がる事ができるのですか？」と質問をしました。大先生の答えは「それは、ワシではないのだ」と仰られました。合気神社例大祭の時に、藤田某という方が身体や手足を縛られた状態から忍者のように縄抜けするのや、お腹の上にのせた大根を刀で切る据物斬りも見ました。

——当時の稽古の思い出、印象に残っている先生、先輩についてお願いします。

稲垣…大先生のお住まいは道場（二十四畳）と廊下でつながっている四畳半の居間と寝室からなる質素な佇まいで、内弟子をしていただいた西内さんと、既に現在の場所に住んでおられた齋藤守弘先生（故人）ご夫妻が、開祖ご夫妻のお世話をされていました。稽古は一般の大人と同じ時間で夜の七時から八時でした。

磯山先生は昭和二十四年、十二歳で入門された憧れの大先輩で、私が入門した

時は航空自衛隊千歳基地に勤務され、たまに帰郷されたときに受けた稽古は厳しいものでした。

夏場は畳を道場の隅に片づけ板の間で稽古をします。膝の皮は剥け、化膿し辛かった思いがあります。先輩方は自営業者が多く、今のように機械化が進んでいないため、人力で作物を作っていたので、肉体は鍛えられておりました。また齋藤先生が合気道に入る前に空手をやっていた影響で、それぞれ自宅に巻き藁を作り拳や手刀等を鍛え、横面打ちの受けの鍛えは木剣で打ってこさせ、それを素手で受ける鍛錬をしていました。他の道場から来て稽古した人には、厳しく感じられたと思います。入門二年後に初段を頂いた証書番号が七二三号ですから、合気道界全体でも会員数はまだ多くなかったと思います。

——開祖の思い出をお願いします。

稲垣…大先生は鎮魂行や西式健康法・真向法を取り入れた体操が終わると、長いお話しをされてから稽古に入りました。その時はチンプンカンでしたが、今になって「合気神髄」や「武産合気」を読みますと、その当時の情景が浮かび、断片ではあります耳に残っています。大先生の指導法はまず「体の変更」より始め、片手取りが始まる連統して片手取りの関連技に入り、気の流れの技より、確り握らせてからの技が中心でした。教えると言う言葉は使われず、神様から授か

ったものをお伝えするという気持ちからだと思うのですが、次の技を展示するときは「申し上げます」でした。

昭和四十一年、二年頃、私が大学生で帰郷したおり、台湾の雑誌社から大先生に取材がありました。齋藤先生も先輩方も都合が悪く、私と弟（澤隆治七段）が愛宕山まで大先生のお供をいたし、写真撮影の際、私達兄弟は境内の霜柱の上を素足になり、大先生の受けを取らせていただきました。

開祖が昇天された昭和四十四年の秋より、二年半ほど、内弟子として修行をさせていただきました。主な仕事は道場敷地内の草刈りでした。齋藤先生が夜勤明けで帰ってくると、二人で汗と泥で身体中真っ黒になり、草かぶれと蜂との戦いで苦戦しました。広大な敷地なので半分ほどきれいにすると、もう片側は手の施しようのない状態になり、常にエンドレスの仕事でした。

開祖昇天後の毎月十四日には、二代道主の吉祥丸先生がお見えになり、「月次祭」を挙行されていきました。「月次祭」が終わった後、吉祥丸先生を囲んで「直会」になり、当時は小人数でしたので、身近にお話しをさせていただきました。お酒を大分召し上がられても、姿勢を崩されることもなく、気持ちが良いなれると、「新選組」の歌を拝聴したものです。そのような縁で、私の結婚披露宴（昭和四十七年）にご臨席いただけたことは、

大変光榮に思っております。

日々心を新たに

――指導者になられた経緯をお聞かせください。

稲垣…茨城支部道場では、齋藤先生が稽古に出られない場合は、先生の代稽古をさせていただいた関係で、技の指導については、余り苦勞に思いませんでした。最初は土浦日本大学高等学校の合気道部を指導し、次に母校の日本大学（法経商の合気道部）、現在、継続しているとこころは、十七年前（一九九六年）より開始した、ミヤンマーでの指導です。特定非営利法人日本ミヤンマー合気会を立上げ、ミヤンマーの青少年を日本へ招聘したり、現地組織の会員に対する段登録料の助成や支援、定期的に行う指導には多くの時間とお金が必要です。小野寺紘毅会長始め大橋副理事長、理事の皆さん、また支援をいただいている多くの方々の無所得の心がなければ、ここまでこれなかったと思います。

――指導モットーをお願いします。

稲垣…怪我をしない、させない言うまでもありませんが、大先生の稽古法に固体（基本）・柔体・流体（気体）稽古技法があります。固体技法の体捌きは、双方が静止した状態から技を始める方法で、この状態から無理なく自分が動いて相手を導き、制する技法を確り稽古することが重要と感じています。大先生は「わし

は60年間、固い稽古を続けてきたから、こんなにわしが在るのじゃ」と気体技法を行った後に語っておられたと先輩から聞いています。次に稽古法のポイントとして、①相手との結び、②角度の研究（相手のバランスが崩れる角度、自分が安全なポジションへの移動）、③呼吸力の使い方、④残心の4つを常に考えて稽古をするよう指導しています。技も大切ですが、それ以前に正しい礼法と道場マナーを指導することが重要です。大先生は合気道を通し「気育」「知育」「徳育」「体育」「常識の涵養」を育むことが大切であると云われています。道場を人格形成の場として捉え、日本の文化をバックボーンとし、他の文化を理解する度量をもつ日本人の養成が指導者の重要な役割だと思います。

前項でミヤンマーの指導のことを述べましたが、「合気道修行の目的とは」をどのように伝えていくか悩みました。そこで十七年前、私なりに五項目に纏めてみました。

1. 困難に出会っても、もちこたえる丈夫な身体と気力を養成すること。
2. 民族、宗教、思想及び政治を超越した良い人間関係をつくる心を養成すること。
3. 自分をとりまく人々、祖先、国家、宇宙に対し感謝する心を養成すること。
4. 自らに与えられた天の使命を早く感じ、ものごとを創造する心を養成すること。

と。

5. 世界平和と自然環境を整える心を養成すること。

毎朝、起きて顔を洗い、歯を磨くと同じように、日々心を新たにしておぼろ姿勢を持ち続けることが大切に思っています。

周囲を照らす一燈に

――自分の稽古のテーマと考え方をお聞かせください。

稲垣…二代道主・植芝吉祥丸先生の監修された合気道開祖・植芝盛平語録「合気神髓」を読み下し、開祖の心を知り、技と心の関係を理解し、自分の使命を知ることです。道を求めていくと神様は必要な人に逢わせてくれます、私にその導きをしてくれた方は奥多摩合気道会の志村壽隆七段です。私は大本の信徒ではないのですが、大先生の精神性を理解するには、「大本基本講座」の受講をお勧めします。

次に「剣・杖と技術の理合」の研究をしていくことです。相手との結び、正しい半身を身に付けることにより危険の少ない技術を武器技から学ぶことが重要だと思います。三段の審査規定に、太刀取り、杖取りが入っていますが、これ等の技は高度な技で、習得するには、基本の素振りから始めて段階的な稽古手順が必要です。大先生から齋藤先生に伝えられたものを、次の世代に伝えていきたいです。

「大いなる 合気の道は 厳しくも 岩間の郷に 咲け桜花」

――最後に稽古をしている人たちへのメッセージをお願いします。

稲垣…私も齋藤先生の亡くなられた七十四歳まで、あと七年間、何をやらねばならないか、考える年齢になってきました。大先生が目指した地上天国建設を推し進めるには、大先生の口述されたものを、理解し易くお伝えすることが重要であると考え、私の生涯学習のテーマとしました。私の信条は、安岡正篤先生が唱えた「萬燈行」です。暗黒を嘆くより、一燈を點けましょう。我々はまず我々の周囲の暗を照らす一燈になりましょう。手のとどこ限り、至る所に燈明を供えましょう。一人一燈なれば、萬人萬燈です。世界はたちまち明るくなりましょう。互に真剣にこの世直し行を励もうではありませんか。

大先生と「あの世」でお会いした時、胸を張って「大先生のお陰で有意義な人生をおくることができました」と言えるように、「取り越し苦勞はせず、過ぎ越し苦勞を思わず、刹那を生きる 出口王仁三郎聖師」で生きていきましょう。

プロフィール

稲垣繁賢（いながき しげみ）

昭和二十一年一月三十日

茨城県出身。茨城支部道場師範。八段。